記憶の集合体
レスモア
1993
Reverb
Fish & Sheep
無知
いけすかない
How's Your Day
ラストシーン
ARDENT
()
She
Out Of The Blue
Thirst

FACE THE MUSIC
Vanish Into Smoke
コッツウォルズ
身動きできない
泡の日々
Enemies
新しい朝
APRIL
ヴェローナ
Gimme
Marvelous
ウィスタリア
mew

Mortal
I don't know Morning
ミルクシュガーガムシロップ
dew
Paralyze Paradise
その後に

LOST TEENAGE
アクアリウム
sus
手首
裸のままで

映画のように
Alice In Wonderland

記憶の集合体

哀しむ理由も生きていた証も
全ては消えていく記憶が居るだけ

三年前の季節は薄れてしまうさ
何年間も費やして答えを知るときは

その時は

心や身体はここにはもう無いけれど
記憶を集めて明日も息をする

レスモア

白いシャツの袖　真綿へ染み込む
ひとみに映した　ニセモノとゆめ

何を伝えたくて　ノイズに塗れる
心を研ぎ澄ませ

１９９３

相槌　憎悪が混ざり合う
お互い疑い頭を冷やす
政令都市では飾りを
擦れた眼球　緑と排気ガス

水陸両用　アドバタイズ
あれは人の形した何かです
１９９２年１５ヶ月先の産まれた日

明日も繰り返される生命体　越えて行け
アイリス　清潔　AB 型の色　アイラヴユー
今　どこで　何をして　生きている？

Reverb

夢から覚めた僕等の生活
必要な物は多分それだけ

理想を叶えた彼等の生活
呆れるほどに幸せだろう

だから？

巡る静脈に吐息を混ぜて
いつの日も渇き死んだ言葉
揺れたリヴァーブを鳴り止めないで
その目で何を見ているの

溺れている　愛してくれ

無知

曝け出す肌　その手を汚していた
いつからだろうこの胸が高鳴りを忘れて
何も感じなくなったんだ
その眼が好きで　今　君に触れていたい
もっとよく見せて　そして味わおうよ

甘い匂いや微かな鼓動が
全ての理由をどうでもよくする
朝が来るまで覚えていなくても
身体を預けて溺れ続けようぜ

Fish & Sheep

魚と羊　鮮やかに染まれ
心をそこに置いてきてしまった

僕等の願いを　僕等の祈りを

いけすかない

ex 鼓動 吐息 耳鳴り 泡に散れ
酷いヒューズの塊
青 罠 遊泳 黒いアレに見える街
得体のないヘドニズム

あの家の上の例の女神
エロ イエロー
舌と下の歯で噛むガム
編む Hello

崩す 揺らす 溶かす 壊す
減らす ヘルス 交わす
「ねえ俺は正常さ」

Killi'n The PLANET
頭の中は軽薄です。
IDOLATER 愛と冷淡
ありふれたアイデア 優越感

浴槽 吐露 退廃 正解 労働 生命
生まれ変わる 生まれ変わる
生まれ変わる 生まれ変わる

How's Your Day

息をするのにも飽きたころ 心と身体を切り離していく
誰にも知られず望まれずとも そして生活は続いていく

夢を見ている それだけのこと

How Was Your Day わかっていたって わからなくたって
How Was Your Day いてもたっても いられなくなって

ラストシーン

古い映画のラストシーン
枯れ果てた夏の花
手垢に塗れた憂鬱
カナダ宛ての手紙

名前を持たない子供
偽物でも構わない
甘いミルクを溶かして
空ビンに注いだ

排気ガスを浴びながら
錆びた鉄が崩れてく
エンドロールはもう過ぎて
砂を噛んで待っている

観覧車の頂上
ベランダに焦燥感
この身を焦がし続けて
太陽を掴むのさ

無重力の四畳半
電気羊の夢を見る
アンドロイドに成り果てた
悪魔のような美しさで

ARDENT

熱を失くしたどうでも良くなった
逃げる為の理由を探している

何の為に生きているんだっけ？
もう忘れてしまった
退廃的な世界で目を逸らす
自分が許せない

生きていく為に体を売った
死んでいく為に心を売った
人を騙すのが仕事です
夢を見るのが夢です

何を守りたいんだっけ？
もう忘れてしまった
退廃的な世界で目を逸らす
自分が許せない

()

壊れていく事が美しいんだと思う
綺麗なままではいられないから

剥がされていく 汚されていく
上塗りばっかりしているんだよ
中身が無いなら意味がないのにね
失う事にはもう慣れたの？

She

三月三日に三日月が笑う
離れられない　思い出に代わる
抱き締めた時のシャンプーの匂い
薄れていくよ　いつからさ

今日も生きている　忘れられない
少しの間は永遠でいたい
いつかそう言った　君はそう言った
この夜の果てに歌う

失ったものは二度と戻らない
髪の匂いが絡みつくよ
失せてしまった支配欲
変わっていた　いつからさ

欲だけに触れて繋がって
欲だけに触れて繋がった

今日の記憶を忘れられない
少しの間は永遠が欲しい
いつかそう言った　君はそう言った
この夜の終わりに歌う

Out Of The Blue

光があるから影があるように
君がいるから僕がいる
太陽があるから月が隠れるように
君が笑うと僕は苦しくなる

夜が明けるまで笑った
夜が明けるまで笑ったんだ

朝までかけて全てを捨てた
選んだ道は間違いだらけだ
そういって全てを拾い集める
僕を見て君は笑うだろう

失った永遠を今もまだ見てる
君は笑っていたんだ
失った永遠といつか出会うなら
僕は笑えるんだ

不安を抱えながら生きている
夜が明けるまで怯えたんだ

朝までかけても何も見えないまま
失うものは限りなく続くだろう
そういって全てを拾い集める僕を見て
君は笑うだろう

川の向こうのあの国まで
行きたいと願って橋を渡る
思いがけなく荷物は重くて
もつれる足元すくう君に

朝までかけて全てを捨てた
選んだ道は間違いだらけだ
そういって全てを拾い集める
僕を見て君は笑うだろう　だけど

過ぎていく日々に立ち向かう現実を
選んだ道を歩けるのなら
Out Of The Blue
全てを失ってしまっても僕は構わない

Thirst

水平に裏返る満ち足りた夢のあと
再生を望みながら全てはそう壊れていく
泥に塗れて何かを待っている
溢れる程の熱は溶け切った

空っぽの身体に光を集めて
意味がない　くだらない
渇いた鼓動は痛みを忘れて
価値のない　勝ちがない

清潔な静脈に擦り切れた春の風
大抵は吐いていた本当のこと以外
懐かしい匂いに頭を埋めて
呆れる程の熱は過ぎ去った

今　歌いたいこと　僕等は笑っていたいだけ

優越に浸りながら溺れている日々の泡
俺達は飢えている　最初で最後の世界
時計の針　甘い眠気　緩い朝を待ちながら
生きていた理油は　記憶の集合体

答えは要らない約束をしよう
未来のどこかで繋がれるように

空っぽの身体に光を集めて
意味がない　くだらない
渇いた鼓動は痛みを忘れて
価値のない　勝ちがない

どうしても

FACE THE MUSIC

溢れ出す陽射がアスファルトを染める
彼女の髪を透き通り窓辺へ伝っていた

何もないふたりは優しさに焦がれてく
冷たい街で息をする身体を奪っていた

そこまで行けるか
僕等は砕け散る青のように
このまま溶けよう世界を塗り潰せ

部屋の壁の模様やマフラーの巻き方が
細長い指の匂いと全てが混ざっていた

Vanish Into Smoke

這い回って視界が 空に巻いた水滴が
冬の匂いがしていた 12月の木曜日
燃やすような熱もなく 混ざり合うこともできずに
夢 理想像 白昼夢 そこに在る無意識とは

愛を売ってしまえば 胸に刺した痛みが
別にどうでも良いけどさ そんなこと言われたって
何かをやり直すには 時間がいつも過ぎていた
夢 理想像 白昼夢 そこに在る無意識とは

何を知って生きている 誰を信じて生きている
そんなもんで真実を濁らせてしまうのか

灰になって
意味のない生活を繰り返す日々に花束を
幸せになって
意味のない生活を繰り返す日々に花束を

コッツウォルズ

羊の群れが俺の真横を通り過ぎる
112匹目でもう数えるのを止めた
フィルムの中で暮らしたい 水の青い透明体
浅ましいリズム 怯えないように

雨に有形を映して 深い斜面の上 確かめ合おう夢じゃないって
海で冷凍された愛に 青い屋根の家 そこには無いと気付いている

俺は既に死体かもしれない

身動きできない

窓に映す背中は 羽根を開く 初めての呼吸 鍵を失くした

混ざり合った心臓と 溶けきらない日々に 溢れる青突き刺す声
身体中を蝕むように絡み付く全ての痛みを剥がして

浅い海に浸かって溺れないように
もがいてみたけど沈んでいった
朝に為るまで 眠れないから

下らない奴に縛られた心 投げ売りで安くなったこの身体
甘い言葉で連れてかれる子供 汚い姿になると捨てられる

身動きできない

どうして手錠を掛け合いたい
何処にも逃げられないように
縛られた全ての痛みを剥がして

泡の日々

僕等はこのまま溢れ出した渦に飲み込まれてく
それさえ溶け切るそんな儚さに触れそうになる

透明な肌に希薄していく
いつの間にか消えて無くなった
壊れた日々の傷を埋めてく
誰の声も聞こえはしなかった

生まれて死ぬまで 理想の確かめ方 わからないから
胸に咲く花 注ぎ込む青 それは脆くて壊れやすいの

あの日の夢を忘れてしまった
そんな風には生きていけなくても
明日がまた来そうな気がしたんだよ

泡になって溶けてしまえば
記憶を持たなくてもいいのにね
いつもずっと空っぽで何もないまま生きていた

Enemies

いつもずっと空っぽで何もないまま生きていた
憂い 夢 柔らかな歌 朝になって薄れてしまう物
透明な声が 突き刺す光が 渇いた胸を 潤してくれるなら

それが全て敵になるから

どれもきっと無力で役に立てないものだろう
呼吸 指 見逃した日々 誰にとって身を守る術が
曖昧な傷が 絡まる痛みが 汚れた肺を 濁らせてしまうなら

それが全て敵になるから

明日が来れば それは味方に なれるだろうか なれやしないさ

新しい朝

灰色の空が街を包み おろしたての靴はすぐ汚れる
気休めの光 雨宿りして 道を塞ぐものが多すぎる
こんなはずじゃないんだけどな

新しい朝が迎えに来るよ 乗り遅れるなよ GET RIDE WITH ME
どうにでもできる有り余る日々 限りない青で LOOKOUT FOR YOU
危うい嘘と優しい色が 眠れない夜をマシにしていく
新しい朝

日の沈み始めたこの街で しとりひたりと雫にうたれる
天気予報と まどろみの中 生まれた頃を想像している
こんな所で終わらせない

新しい朝が迎えに来るよ 乗り遅れるなよ GET RIDE WITH ME
誰にでもなれる出来過ぎた日々 揺るぎない歌で LOOKOUT FOR YOU
あざといキスと可愛い色気 下らない俺をマシにしていく
新しい朝

APRIL

静脈を巡る美しい景色
青に焦がれて雨の中に
大切な人や大切な歌は
淡い記憶に溶けていた

パラダイムの渦
ありふれた嘘と偽りを

僕等このままくたばっていいように
フィルムを回した４月のはじめに

微睡の声を輝いた軌跡
揺れる鼓動は春の朝に
擦切れた光白日の季節
甘い匂いに透けていた

吐息とノイズ
くたびれた夢と願いを

僕等いつでも繋がれるように
指を這わした４月のはじめに
僕等これから生きられるように
意味を重ねた４月のはじめに

ヴェローナ

掴み損ねた夢 どうして触れられなかった
果たせない約束 空はもう潰れそうに低い

止まない雨に打たれながらそれでも
消えてくれない青く染められた記憶

忘れたふりをしてその胸の中に
残した匂いヴェローナのように
間違っていたのか混ざり合う世界は
いつでもずっとヴェローナのように

身を削り灰になる 揺れているノイズ ひび割れたガラス瓶
細い指 白い肌 あの映画のラストシーン

Gimme

簡単に奪われてしまうよ 簡単に生きられなくたって
ゼロサムゲームなんだ 目を閉じるな前を向け
鼓動をもっと早く 燃え尽きて 宙に舞え

今灰になって沈んでいった いつも焦がれて意地汚いな
愛を知って生き延びたんだ そんなことはどうでも良いさ

いつから知っていたんだ いつから分かっていたんだ
這い回って溺れていった 欲に塗れて薄汚いな
愛を売って生き延びたんだ そんなことはどうでも良いさ

Marvelous

マーベラスに呼吸が乱れる
ジーニアスで臆病な未来へ

この胸で 燃えている 枯れた花 揺れている

アノニマスは誰にも知られない
スーベニアが記憶を浮かび出す

それは簡単なことで いつも単純なもので
解り切っているのに 手を伸ばしてしまうよ

その指で 愛と憎悪 夢を見る 俺の全て

ウィスタリア

カモミールと柔らかなキャンディ アルコールに溶かしておいたから
ベロニカの名誉 真実は不完全で 無防備に歩けばフラっと優しさがグッと

朝焼けの焦がれた青

Feel You 淡い夕 そんな声が聞きたくて
スケートシューズ Highly Evolved この夜を越えていこう
Keep You 愛に酔う 夢の続き見せたくて
スケープゴート Craig Nicholls この街を抜け出そうぜ

mew

大抵夜は寄り添い合って 剥がさないでね 触りたいの 眠りたい
可愛いリズムで呼吸している お腹すいたな 誰か構ってくれないか

夜明けを待つのは得意じゃないけど それもいいかな 楽しそうに笑って
目眩がするほど激しく光ってた そんな風にさ 忘れないでいるよ

あるがままの姿形で生きてく術を探している

苦しい時には声を出さないで 気付かないでね 壊さないで 離したい
俺は誰に何を言われようとも生き続ける 生き続けていくよ

あるがままの姿形で生きてく術を探している

永遠なんてある訳もないけど それはなんだか 限りない気がしていた
俺は誰に何を言われようとも生き続ける 生き続けていくよ

息をしていたい

Mortal

光の匂い 身体を射て 時計の針 揺れる体温
消えない欲望 憂いた祈り 呼吸と泡 左手の色
夜を駆ける 裸のままで 痛み続けて何を失くした
いつか全て忘れてしまいそうになる

今を全て捨ててまで信じる価値はあるの
死にたくもないしただそれは続いてく
この世の果てで天使が首を刈るのを待っている
それでも俺は生き残っていたい

アネモネと絵 真綿を詰め 綺麗な青 夜のメロディー
拙い愛を 渇いた胸に 6月の朝 沈んでく猿
冷たい頬 水色の街 歪み続けて何を隠した
明日を全て渡してしまいそうになる

いつか全て朽ちるのに繋げる意味はあるの
知りたくもないしただそれは続いてく
この世の果てで未来が砂を噛んで待っている
それでも俺は生き残っていたい

生きていたいんだ

I don't know Morning

定命の朝 この夜に溶ければ何か変われるさ
冷たい孤独 消えない嘘を吐いた明日、眼が覚めたら

本当はもうずっと前から分かっていたことさ 明日も明後日も明明後日もないことを
いつだってただ今日を塗り潰して腐らせる日々だ そんな生活をいつまでも繰り返してる
俺だけは夢に溺れてたい 薄れた鮮やかさ

I don't know Morning この目を閉じて眠りにつけば 新しい世界が開けるさ

清らかな声を壁に塗りたくるだけ 勝ち目なんてないのさ

本当はもうきっとどこかで気付いてたはずさ 名声も羨みも夢のなかで叶うもの
いつの日か輝いて認められて愛される日々を願っている

この夜が明けるまで失いながら生きてゆく
明日、眼が覚めたら夢だったなんて 全て現実だぜ逃げ場所はないんだよ

I don't know Morning この目を開けて刻み込むのは 新しい世界の夜明け前
I don't know Morning 美しく破滅する時まで その目で俺を見続けてくれ

ミルクシュガーガムシロップ

甘い物が好きな君は
コーヒーにはミルクシュガーガムシロップ

今すぐここを抜けだそう
コーヒーはミルク色
幼い君はそのままで

ねえ君はこの生活を止めたほうがいいよ
今すぐに

dew

愛される夢を見ていた
目が覚めて俺は地に堕ちた
許されることなんてないのさ
今それは全てを知っている
垂れ落ちる滴に気付いた
いつの間に雨は止んだんだ
許されることなんてもう
永遠に無いっていうことを

汚されるだけで僕等のその願いが叶うことなんてあるはずもないからさ
汚されるだけで僕等のその祈りが救われることなんてあるはずもないからさ

愛されるそれを見ていた
純粋な頃の優しさは
垂れ落ちる滴に似ている
今それは俺の目の前でさ
崩れたんだよ
砕けたんだよ
見えなくなって
永遠に触れなかったんだ
汚されるだけで

Paralyze Paradise

心を失くしても生活はあるらしい
身体は不完全で役にも立たないさ
感覚は失くなって色も分からなくなった
まるで天使みたいだそこに立つから

それはなんて綺麗なんだ
触れやしない祈り続けた

今からパラライズパラダイスへ行こうよ

その後に

煙草の火を消したその後に教えようとして止めた
溺れるように祈り続けたって願いは叶わない

明日も君は生きてるだろうな
明日も生きていられるだろうか

その後にどこへ行こうか
君が望むものはここにないだろう

その後に夢を見ようぜ
君が望むものはそこにあるだろう

LOST TEENAGE

今も青い夏を思い出す
照れ笑いと瑞々しい甘い鼓動
あの日の子供達は大人になる事を忘れていた

世界の終りに近付いてくこと　淡い期待も打ち砕かれてく
僕等には未来を選べやしない　望むだけで自由になると思っていた

忘れられないことがたくさんあったっけな
君の温もりと鮮やかさを忘れていく
この歌も聞こえやしないんだろうな

僕が見ていたあの夢は
叶うはずがない　分かる訳もない

僕等はそれでも生きていくだけさ
他に何が欲しいんだ

アクアリウム

死んだ魚の目をしている　君は輝いていたけど
死んだって構わない　君が輝いていたから

アクアリウムの魚達　泳ぎ方を忘れていく
綺麗でも見せられる為に生きるというのなら
悲しむ以外に術はあるかい

自由に泳いでたいのって君は笑っていたけど
飼われるほうが楽じゃないのって僕は思ってるんだよ

海に飛び込んで君と認め合って
手を繋いで写真を撮ろう
汚い嘘を吐き出せよ　飲み込める喉をくれよ

sus

時計の針 疑いと不安で
堕ちていく 欺いて笑うさ
灰になる世界で心を焦がして
あの日の生活は腐りきってしまった

濁りのない朝と僕は出会えない
見えない 信じてみるけど
不安になって それでも生きている

君の手をずっと繋いでゆく事はできるだろうか
時計と見えない嘘に怯え続ける生活を棄てる

帰る居場所がある事を君は知らない

消えない 疑ってみたけど
離れられず 今でも触れている

君の手をずっと繋いでゆく事はできるだろうか
時計と見えない嘘に怯え続ける疑いを吊るす

手首

捨てる白い心を汚れた窓枠に並べて
一つずつ壊れてく泡になる気体を
触れる飲み干すタブレット優しい嘘で
手首からこぼれ落ちた淡い言葉を
僕等は気付けないから

君の手が僕の頬に触れる度ほら
生きる理由を知らないことは幸せだったかな

君の前では言葉は意味を持たない
知りたいの？僕は歌う

君の手を僕の頬に触れてくれよ
傷跡を隠すな生きる理由をくれてやる
意味が無いな　幸せだったかな

裸のままで

身にまとっている汚らしい服を一枚ずつ剥ぎ取っていく
小さな袖そのボタンを一つずつ外す君はストリップみたいだ

身にまとっている汚らしい嘘が一枚ずつ剥がされてゆく
小さな声でその嘘を一つずつ告げる僕はストリップみたいだ

裸の君を抱きしめていたい
全てが僕等には現実であるように
永遠が不完全であるようにさ

映画のように

僕が住み始めた街では
もう随分暖かくなってきたけど
君を残してった街は
まだ雪が降っているだろうか

五日で忘れる映画の中身　君は気づいてしまった
何かを失くしてしまったと　雪になれなかった雨が降る

僕の街は今日は雨だよ
君の街は雪になるだろうか
映画のようにわがままに生きていたい

こんな世界は誰の目に映るってさ
映画の中だけでいい

いつかは忘れる景色と記憶　僕等気づいてしまった
何かを忘れてしまったよ　雪になれなかった雨が降る
雨が降る

Alice In Wonderland

不思議な国では君が正しい
自己矛盾だらけの君が正しい
夢見がちな奴はこの国では主役で
バニーの尻尾に振り回されてる

灯りを消して姿を隠して
不自由な国で永遠に自由で
もう一度だけ夢を見てたいな
わからないまま笑った

きっと僕等は誰にも知られずに生きている
誕生日じゃない日を祝った
ブロンドの長い髪薄く白い肌
か細い手首や伏し目がちな目でさえも

灯りを消して姿を隠して
二人だけの夜に永遠に一人で
もう一度だけ夢で会いたいな
全てを知って笑った

灯りを消して姿を隠して
嘘だらけの君は僕だけの真実
もう二度と夢で会えないな
大切なもの失くした

灯りを消して姿を隠して
不思議なこの国で永遠に生きていく
もう一度夢で会いたいな
眠れないまま笑った